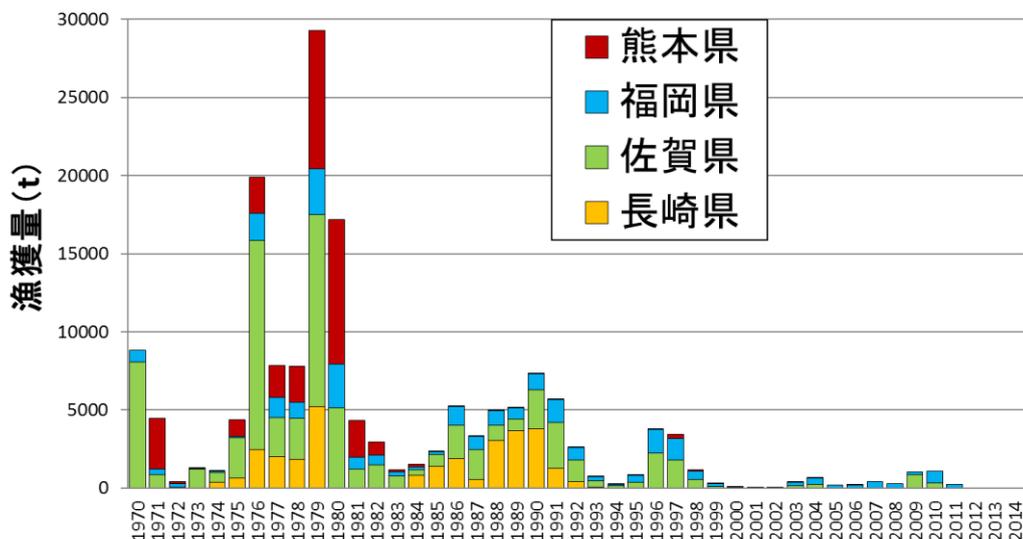


タイラギの漁獲量

第 41 回有明海・八代海等総合調査評価委員会により、1970 年から 2014 年までタイラギの漁獲量が整理されており、近年の漁獲量の低迷が続いていることが指摘されている。

有明海でのタイラギの漁獲は 1970～1998 年までは数年おきにピークがみられ、1979 年には最大となる 29,305t を記録した。その後、熊本県では 1980 年代から、長崎県では 1990 年代から、佐賀県・福岡県では 2000 年頃から漁獲量が減少し、2000 年以降は有明海全域で漁獲がない状態にまで低迷した（図 3.9.1）。2009～2010 年にかけて、1980 年代の豊漁期に近い密度で 12 年ぶりに漁獲量の回復がみられた（最大 1,078t/2010 年）が、以降は再び低迷し、2012 年より休漁となっている。なお、タイラギの漁獲量は属人統計のため、県ごとの漁獲量がそのまま生息海域からの漁獲を示しているとは限らないことへ留意する必要がある。（後略）

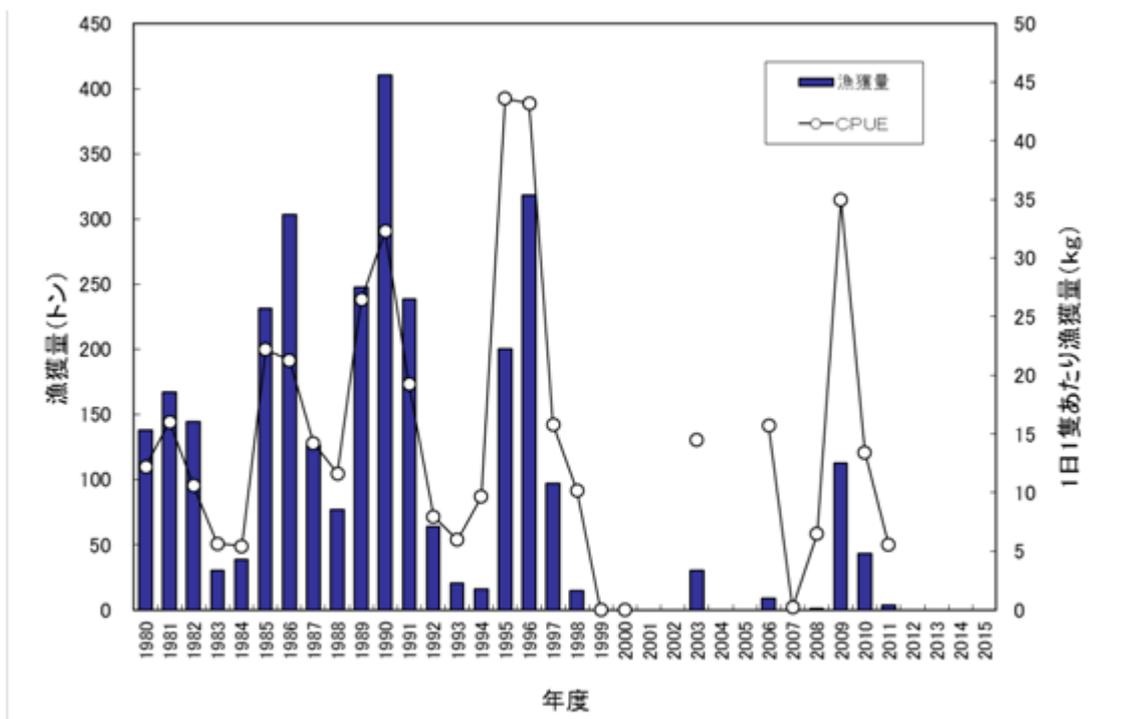


注) 2007 年以降タイラギの漁獲量は農林水産統計で集計していないため、県のデータが存在する福岡県分（福岡県提供）の漁獲量のデータのみ計上。2007 年以降の佐賀県分については、佐賀県有明海漁業協同組合大浦支所における貝柱取扱量が存在することから、佐賀県の 1980～2006 年（休漁の 2001, 2002, 2004, 2005 年を除く）の殻付き重量データと貝柱重量データから、殻付き重量=7.76×貝柱重量の関係式を得て、2007 年以降の殻付漁獲量を求めた。

図－1 有明海におけるタイラギの漁獲量の推移

出典：農林水産統計、福岡県提供資料及び佐賀県提供資料（貝柱重量）をもとに環境省が作成した。

図-2に佐賀県有明海漁業協同組合大浦支所におけるタイラギ貝柱漁獲量及びCPUE (CPUE = Catch Per Unit Effort : ここでは1日1隻あたりの貝柱漁獲量[kg])を示した。漁獲量とCPUEはおおむね同調しており、資源量が多いほど漁獲量も多くなることが推定された。1980年から1997年まで、年変動はあるもののCPUEは5~45kgの範囲で変動していたが、1999年から2015年までのうち、1999年と2000年はCPUEがゼロとなり、2001~2002年、2004~2005年、2012~2015年は休漁となる等、資源量悪化によると推定される漁獲量の低迷が続いている。



注) 漁獲量のない年度は休漁した年度である。

図-2 佐賀県のタイラギ貝柱漁獲量と CPUE の変化

出典： 佐賀県提供資料

出典：第41回有明海・八代海等総合調査評価委員会資料

アゲマキの漁獲量

現在の農林水産統計ではアゲマキは「その他貝類」に含まれているので、一般にはアゲマキ自体の漁獲量を知ることができない。佐賀県水産試験場は農林統計をベースに明治34年(1901年)～昭和58年(1983年)までの漁獲量を整備している。その後は佐賀県有明水産振興センターが農林統計事務で把握されている統計をもとに漁獲量を整理しており、有明海・八代海総合調査評価委員会は両資料を統合して2000年までのアゲマキの漁獲量推移図を作成している(平成18年12月21日)。これによると1992年以降は統計上に漁獲量が現れず、漁業としては成立しない資源になっていることがうかがえる。

漁獲量は明治39年に最高値8,603トンに達した後、増減を繰り返しながら大正10年に1,000トン以下に、その後現在まで500トン以下の水準にある。特に昭和5年から48年までは、18年、21年、33年の突出年を除き、ほぼ100トン前後の低水準で推移している。昭和49年以後は漁獲レベルが400トン以上に上昇し、資源は回復の兆しをみせている。大まかにみると、明治40年代をピークに昭和初期から20年代にかけて、減少カーブを描き、昭和40年代に入ってやや上昇傾向に転じている。

また、突出年の翌年に減少年というように短期変動の激しいことがアゲマキ資源の大きな特徴である。アゲマキ資源がこのような大変動する理由は明らかにされていないが、明治38年以降の減少に春秋2回の異常へい死が関与していることを藤森²⁾が報告している。へい死の原因については、明確な原因は不明としながら、環境因子、特に水温と塩分の影響を重視している。

佐賀水試が明治44年から昭和3年まで継続して調査した結果、へい死原因について①比重と関係があり1.010~1.020の間では成育が順調であること、②秋期のへい死は、産卵後の疲へいが一因であること、③風による浮泥の堆積、④春、秋ともに高温でしかも低比重のときに起ることが多いことなどを報告している。

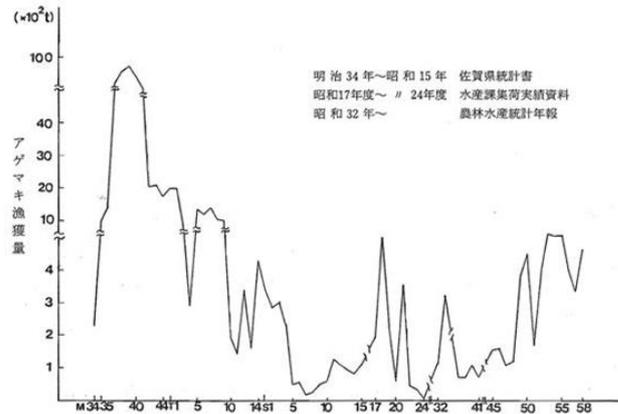


図-3 アゲマキ漁獲量の経年変化

注) 文中2) の引用元は以下のとおり。

2) 藤森三郎, 1929, 有明海干潟研究報告, 福岡県水産試験場

出典) 吉本宗央, 1986, アゲマキの生態-II, 漁獲量の長期変動について, 佐賀有明水試報, 第10号

近年の漁獲量は、1988年の800tをピークに激減し1992年以降ほとんど漁獲がない(図-4)。漁場は、1980年代には佐賀県西部海域から、筑後川・矢部川・白川河口域にあり、八代海にも生息していた。1988年夏季、湾奥西部及び中部の養殖場で大量斃死が発生し、1ヶ月で漁場全域に約3年で湾東部まで拡大した(図-5)。

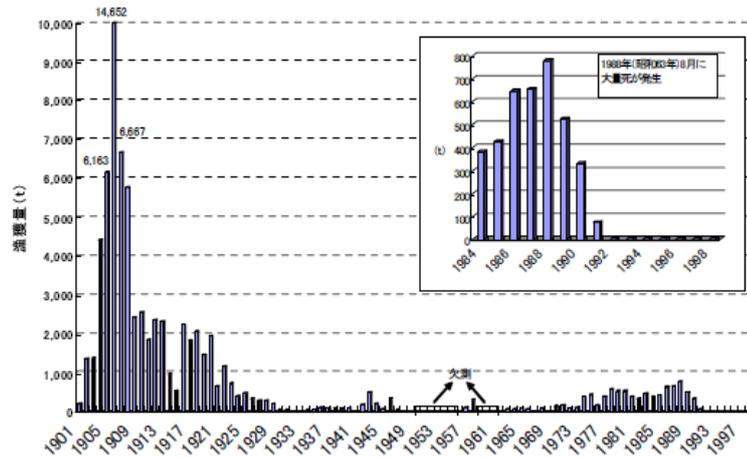


図-4 佐賀県有明海域におけるアゲマキ漁獲量の推移

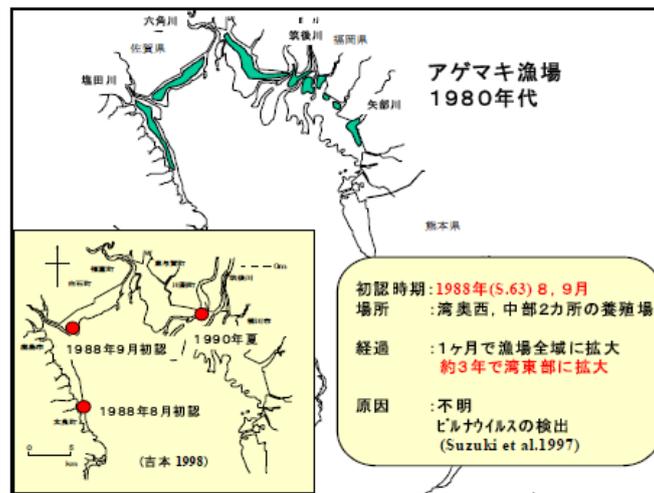


図-5 アゲマキの漁場図(1980年代)、大量斃死の発生場所

出典) 伊藤史郎(2005)「第15回有明海・八代海総合調査評価委員会 資料-3 有明海における二枚貝について」

参考文献

吉本宗央, 1986, アゲマキの生態-II, 漁獲量の長期変動について, 佐賀有明水試報, 第10号

有吉敏和, 2007, 「タイラギ・アゲマキ資源回復の取り組み, 有明海再生機構ホームページ

<http://www.npo-ariake.jp/act-report/symposium/img/070325/H190325ariakekaikouza.pdf>